（第3種郵便物認可）

読売 俳壇

矢島 渚男 選

二回目の助走の視野に虹の立つ　倉敷市　谷吉　修一

【評】各地で陸上競技の大会が行われた。これは選手の身に立つ応援の句か。一瞬の虹に成功を賭けて「行こう」。「二回目の」「視野に」が巧い。

出迎へは会津訛りと夏の雲　横浜市　塚本　文武

【評】東北地方へ旅行したのだろうか。玄関に立つと、その独特な抑揚がうれしい。方言に歴史が詰まっていると言うか。私も幾人かの懐かしい友人を思い出す。

初恋は紫の恋桑いちご　横浜市　大井みるく

【評】ムラサキ色の恋。と言えば、わが信州でも馴染みの桑の実。戦争で甘い物の少なかった幼いころ、手や口を紫に染めて食べたものだ。

悲しみの如く豊かに夏銀河　松江市　三方　元

川の音聞こえて来たる青簾　相模原市　はやし　央

戦争に与せぬ日本姫女苑　青森市　天童　光宏

万緑や己を叱る捜しもの　奈良市　奥　良彦

犬は水夫はラムネを飲み干して　宮城県　梶原　京子

夜振り灯や岩へ背をよせ眠る魚　下関市　粟屋　邦夫

踊り果て道の暗さが動きだす　神奈川県　石原美枝子

高野ムツオ 選

じじばりの採れるものなら取れと這ふ　相模原市　荒井　篤

【評】地縛はキク科の多年草。歳時記にはない。茎が伸び地面の下を這う。芝生などでよく目にする。抜いても抜いても蔓延る繁殖力はいくらでも抜いて見ろと言わんばかり。

桶の中ひしめく鰻絡まらず　東大阪市　梶田　高清

【評】鰻屋の桶の中の鰻。何匹も重なりながら互いに絡まることがなく、ひっそりとひしめいている。そこに鰻の哀れを見てとっている。

蜥蜴の尾瑠璃放ちつつなほくねる　川越市　益子さとし

【評】瑠璃蜥蜴だろう。逃げる途中で身を守るために尾を切り落としたのだろう。尻尾自体が今もなお生きているような臨場感がある。

遥かなる山河へ吹けり草の笛　城陽市　近藤　好広

てのひらの沢蟹なほも泡吹いて　小田原市　北見　鳩彦

ベランダに水鉄砲の忘られ　横浜市　佐藤　祐一

行きにあり帰りには無し梅雨茸　柏市　藤嶋　務

あめんぼや母はすっかり軽くなり　福島市　横山ひろこ

労ひの言葉に汗を拭ひけり　香川県　福家　市子

夏の雲まはりの雲を引き寄せて　大津市　竹村　哲男

正木ゆう子 選

スノードロップ幸せだつたことにする　東京都　小池　博美

【評】「幸せだった」と「だったことにする」では大いに違う。「だった」では目出度過ぎ。「ことにする」の屈折が共感を呼ぶ。内容と直接関係の無い花の名も、適切な取合せだ。

傷つかず一生終えるカサブランカ　越谷市　和田　恵

【評】一方こちらは、カサブランカを一句の主語として解釈したい。大輪の百合は美しい女性の比喩でもある。反語的に読めば、シニカルな句。

ごく稀に早乙女花と呼ばれたり　福生市　二瓶　利明

【評】早乙女花という素敵な別名があるのに、屁糞葛と呼ばれることの多い花。「ごく稀に」がうまい。今日は偶然花の三句、面白さそれぞれ。

マテ貝や塩に驚く三秒後　周南市　原田　英夫

空豆や見かけ倒しの莢の中　長野県　村田　実

ズッキーニまた献立に乗りそびる　宇都宮市　松広　訓

次の朝電線にいた燕の子　佐倉市　大塚　正明

明易の涙拭へば犬来たる　近江八幡市　塚本　尚子

白欲しき庭に紋白舞ひ来たる　鎌倉市　中江　優子

夏至の午後寸時寂しさ覚えけり　東京都　伊藤　博之

小澤 實 選

二番目の左足から蟻歩く　国分寺市　野々村澄夫

【評】蟻が歩きだす時、どの足から動かしはじめるか、今まで知らなかった。しかし、この作者によると、二番目の左足からだと言う。長年の観察の結果が示されたのか。

ためいきもビールの泡もCO₂　川口市　渡辺しゅういち

【評】つらい時もらすためいきも、疲れた時に飲むビールの泡も二酸化炭素だった。人間何をしても地球温暖化に加担することになるようだ。

脳髄のずしりと重し炎天下　川崎市　折戸　洋

【評】頭が重いとは、よく言われるところだが、ここでは脳髄が重いと捉えた。炎天下に出ると、特に頭の中身の脳髄が、重く感じられそう。

AIがこころ宿す日水母浮く　神戸市　山口　誠

烏食らう轢かれてうごく青大将　川越市　石田浩二郎

短夜や妻の寝顔の健やかに　川崎市　関　直彦

父の日や猪口一杯に足りる酔ひ　横浜市　岡　一夏

今とるか一日待つか雨後の茄子　宇都宮市　津布久　勇

吊革に縋つて立てる西日かな　東京都　天地わたる

一人居の元校長やアロハシャツ　東大阪市　渡辺美智子

枝しおり 折

遠藤容代句集『明日の鞄』　生き物に向ける温かなまなざしが印象的な第1句集。〈ぶつかつて硝子を知らぬ金亀子〉

（ふらんす堂、3080円）

木村瑞枝句集『色鉛筆』　平易な言葉で日々の暮らしを素直に詠む。風通しのいい第1句集。〈ファドを聴く夜濯少し後にして〉

（ウエップ、3080円）

王紅花歌集『緑色の人』　陰りを帯びた心象風景が広がる。歌人で画家の夫、松平修文氏を失った悲しみを歌う。〈銀泥の葉の表の緑、葉の裏の白を並べて仏前に置く〉

（青磁社、2860円）

三藩忠典歌集『曲がらなければ伊勢まで行ける』　当たり前の日常を当たり前に詠み、シーンを変えてしまう。著者の第1歌集。〈近鉄に乗れば十分ほどのこと上り列車で大和八木まで〉

（現代短歌社、2750円）

う

題字デザイン・イラスト　福田美蘭